

## 別記様式

## 会 議 録

会議の名称	令和4年度第7回戸田市外部評価委員会
開催日時	令和4年10月6日(木)午前10時00分 ~ 午前10時56分
開催方法	公室
委員長等氏名	委員長 佐藤 徹                      副委員長 長野 基
出席者氏名 (委員)	委員 興松 敬史                      委員 石田 真由美 委員 宮崎 仁美                      委員 芳賀 良 委員 長谷川 孝雄
欠席者氏名 (委員)	無し
説明のため 出席した者	無し
事務局	石橋部長 佐藤次長 甲原課長 石嶋主幹 野本主任
議 題	答申及び意見交換
会議の経過 及び 会議結果	別紙のとおり
会議資料	・次第 ・答申書及び別紙 ・【参考資料】戸田市外部評価委員会委員名簿

( 会議の経過 )

発 言 者	議 題 ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項
市 長	<p>1 開 会</p> <p>2 議 題</p> <p>戸田市外部評価委員会から市長への答申及び意見交換について (市長から以下のとおり挨拶を行った後、各委員から報告が行われた。)</p> <p>外部評価制度の見直し後、初めての外部評価であり、御多用の中、7回にわたる御審議を賜り、厚く御礼申し上げます。</p> <p>今年度は、業務の棚卸しを実施し、業務の見直しや効率化を図っているが、事業や業務の見直しについては、内部の視点だけでは不十分であり、委員の皆様のような視点の意見や評価は、大変貴重な意見となる。本日、いただいた外部評価結果を各部局に共有し、次年度の予算編成等に反映させるなど、「『このまちで良かった』みんな輝く未来共創のまち とだ」の実現に向け、活かしていきたい。</p>
委員	<p>一番感じた点として、第5次総合振興計画の初年度である令和3年度を評価するという点もあるが、本計画が各部局にどの程度浸透しているのかという点である。もちろん、既存の事業を継続することも必要だが、それだけではなく、本計画に盛り込まれている課題や今後の方向性として必要な取組は何かという視点が今回の事務事業にはあまり見当たらなかった。個別計画や公約事業などもあり、すべての事務事業を本計画に当てはめていくことは難しいかもしれないが、本計画期間の10年間で何をするのか。本計画の初年度であり、今後、見直す機会もあるかと思うので、計画期間終了後に「戸田市に住んで良かった」と言われるような取組が期待される。</p> <p>最後に、本計画はマニュアルではなく、方向性を示したものであると考えている。施策の達成のため、10年間でどのようにしていくのかということ力を強く発信していただきたい。</p>
委員	<p>20年以上、戸田市に住んでおり、今回、市民委員として応募した。市民目線で細かい点も意見したので、詳細は会議録等で確認いただきたい。</p>

第1回外部評価委員会では、第5次総合振興計画の目指すべき人口動態やそこに向け取組を進めている点についての説明があったが、各施策を見ていくと、前例踏襲などから抜け出せていない部分があると感じた。例えば、スポーツ施策であれば、健康増進に終わらずに市が誇るスポーツセンターや彩湖・道満グリーンパークなどの資源を活かした事業を進めることで、シティセールスにもつながるといような発想が必要ではないか。そのような発想がないと、流入人口の増加や企業誘致により税収を増やすなど、中長期的な財政効果を生むような事業の展開ができないと考える。

このような機会をいただき大変勉強になった。今後も様々な形で戸田市の貢献に努めていきたい。

委員

外部評価委員を通じて、よりよいまちにしていくための取組を知ることができた。市の魅力は多くあるものの、その魅力を市民が気付いていないことが多く、残念に感じている。

このような状況の中、外部評価委員会において、戸田ブランドという取組を知ることができたが、まだ知らない市民に対し、PRする機会を設けても良いと感じた。住んでみて実感した市の魅力を市外の方にPRしていくことも重要だが、魅力を発信していくという意識を市民に持たせていくことが今後、大変重要になっていくと感じている。誇りに思える戸田市を目指していただきたい。

委員

外部評価委員会において、感じたことが3点ある。

1点目としては、会議運営について、委員長、副委員長をはじめ、委員の皆様が時に厳しい指摘や鋭い着眼点で評価対象施策を洗練し、よい着地点に着地できたものと感じている。

2点目は、それに応える形で、事務局が実直に説明責任を果たしている姿に、強い感銘を受けた。

最後に、唯一、残念だったことは、オンライン会議が多くなってしまったことである。やむを得ないが、せっかくの機会でつながることができた皆様と実際に会う形でやりたかった。貴重な機会をいただき、とても勉強になった。

<p>委員</p>	<p>委員として、2期目であるが、勉強することが多くあった。</p> <p>感じたことは、自身が行う事業を評価する際に、事業が羅列されており、どの事業に重点を置いているのかわかりにくい印象を受けた。どこに重点を置いているのかという観点を踏まえて内部評価を行うことで、外部評価の際に担当部局の意図が伝わりやすく、評価しやすいと感じた。</p> <p>継続的に実施する必要のある事業が多くある中、予算についても、どの事業に重点を置くのかが重要になると考える。バランス感をもって進めていただきたい。</p>
<p>委員</p>	<p>外部評価委員会における取組は、行政内部に及ぼして、はじめて作用したと言える。自治体が外部評価を実施する目的としては、行財政改革、各部署職員の自己発見、予算統制、部門間連携の促進、市民への説明責任やパブリックリレーション（広報）などが挙げられる中、戸田市は、部門間連携の促進が目的の一つであると考えている。</p> <p>外部評価制度の新たな取組として、今年度からロジック・モデルシートを活用する中で、事業の方向性や部門間連携の必要性の可視化、課題の発見にもつながった。</p> <p>委員としては、今後、外部評価を通じて、部門間連携や市長及び副市長と各部局の議論の方法やコミュニケーションがどのように変わっていくのか、という点に関心があると考える。例えば、戦略会議等の政策会議の中で、このようなロジックで考えているという説明ができるようになれば、成果として挙がっているものと考えている。</p> <p>戸田市の場合は、行革の観点よりは、部局間コミュニケーションの向上など、外部評価制度の目的を大事にしながら運営していかなければならない。他の委員から話があったように、変わっていない部分も多々あるが、変わっている部分もあるので、来年度の外部評価に向けて、見直すべき部分は見直していただきたい。</p>
<p>委員長</p>	<p>コロナ禍で不安であったが、無事にヒアリングを実施することができた。委員の皆様からは、示唆に富んだ意見や提案があり、委員長として大変恵まれたと感じた。また、事務局のサポートも充実していた。外部評価委員会は、評価する側、される側ではなく、委員と行政の協働・共創の場であると捉え</p>

ており、そこから、改善策や新規提案を生み出していくものと考えている。

各施策の詳細については、答申書をご覧いただきたい。全体的な話では、今年度からの外部評価制度の目玉として、ロジック・モデルシートを用いて評価を行うことであった。ロジック・モデルは、目的と手段、原因と結果の因果関係等を可視化したものであるが、実際に外部評価委員会においてロジック・モデルを活用している自治体は、全国的にまだまだ少なく、戸田市は先駆的な取組である。

ロジック・モデルは、様々な使い方ができるが、コミュニケーションツールとして政策議論の活性化にも活用できるものである。他の委員のお話にもあったが、事業は施策目的を実現するための手段であるはずが、前例踏襲や横並びの発想から抜け出せず、その事業の寄せ集めが施策という状況になってしまっている。第5次総合振興計画には、5年先、10年先を見据えた基本目標があり、それを実現するための施策を記載しているが、施策の目的達成のために事業の妥当性や過不足がないか、不足している場合は新規事業を立案していくという柔軟な発想には、まだ至っていないということを今年度の外部評価を通じて感じた。

平成30年度には、ロジック・モデルを作成する研修を実施したことをきっかけに各課で議論しながらロジック・モデルを作成した上で、総合振興計画が策定されたと聞いている。では、なぜ、現状の考え方から抜け出せないかという点についてであるが、人事異動の引継ぎの際にロジック・モデルが継承されていないのではないかと。ロジック・モデルは、引継ぎにも有用で担当する事業と他の事業や施策との関係性を視覚的に理解できるものである。今後、人事異動の際にロジック・モデルについても引き継いでいくことが重要ではないかと思われる。

戸田市は事務事業評価ではなく、施策評価に対する外部評価を行っており、担当部局においても大所高所から見た説明等がほしいが、ヒアリングの際、所管事業を中心とした説明になってしまっている。その要因を考えたが、第5次総合振興計画の策定過程で、各部局が担当する施策の最終目標の認識やビジョニングが十分ではなかったのではないかと。各部局では企画部門が作った計画という認識が強いのではないかと。

また、戸田市では、特に学校教育分野でのEBPMは先進的であることが、よく知られているが、今後は他の分野でもそのような考え方を積極的に取り

	<p>入れた取組を進めてほしい。</p> <p>以上の点を改善する方法としては、後期基本計画を策定する際に、外部評価から見えてきた問題点や課題の解決策を議論できるような場を設定し、事業の見直しやビジョニングを進めることではないかと考える。</p> <p>話は変わるが、本日、群馬県前橋市にある障がい者の就労を支援する NPO 法人「麦わら屋」が作ったロジック・モデルTシャツを紹介したい。本法人の戦略をロジック・モデルにしたもので、最終成果、中間成果、直接成果や取組などが一目でわかる面白い取組である。ロジック・モデルを作成しても内容を忘れてしまう、業務に追われて振り返りや評価の時間が取れないという状況から、Tシャツであれば自然に目につき外部への発信もできるという理由で作成されたとのことである。発信の方法については、議論の必要があるかと思うが、良い発想であり、このような取組はコミュニケーションの活性化や部局間・組織間の課題解決を進める上で参考になる。</p>
市 長	<p>委員の皆様から大変貴重な意見をいただいたことに感謝申し上げます。職員だけでは発想が偏り、外部の意見を受け入れにくくなりやすい。外部からどのように見られているかという点を改めて意識するためにも、職員にしっかり共有していきたい。</p>
	<p>私自身、俯瞰して全体を見なくてはいけない立場であるが、コロナ対応など、突発的な対応が重なると、なかなか難しい場合もある。また、マネジメントの問題でもあるが、職員も業務多忙で、事業の振り返りや政策立案に時間を費やすことができないといった声も聴いている。委員長から話があったように仕組みに組み込んでいくなどの対策が必要であり、そういった点からも、今後、これまで以上にロジック・モデルを活用し、事業などの方向性や考え方を共有していくことが重要であると感じた。</p>
副市長	<p>本日、いただいた答申書の内容を真摯に受け止め、来年度予算に反映できるよう検討し、できない場合については、理由等を丁寧に説明できるようにしていきたい。</p> <p>委員の皆様の話聞きながら、日々、感じている点と符合することが多くあった。市の事務においては、法定受託事務の割合が大きく、法令を読み解き、間違いのないようにしっかりと事務手続を行っていく必要があり、非常</p>

<p>企画財政部長</p>	<p>に労力を割く事務が多いと感じている。それだけでなく、市の未来に向けたまちづくりや市民のために何をすべきか、という目的で総合振興計画があり、その目的に沿って必要な手段を検討していかなければならないが、手段に重きが置かれ、目的がおろそかになるという逆方向になりやすい性質であると認識している。</p> <p>また、市長公約は総合振興計画の内容を踏まえながら、取組方針を示したものであり、手段や取組について各部局に聞くと既存事業に当てはめるなど、目が行きがちである。</p> <p>そういった中で、総合振興計画のどの基本目標や施策の目的に位置づけられているか、何をすればより効果的に目的に近づけることができるかという議論の場として、各部局の次長級職員から構成する3大プロジェクト推進会議を私が委員長として、今年度から開始した。</p> <p>また、十分な連携には至っていないが、部局の壁を越え、連携した取組が実施され始めている。施策の目的達成のためにどのような取組を行うかという委員からいただいた指摘に対して、回答となるような取組を示せるように努力していかなければならないと感じたところである。</p> <p>委員の皆様からいただいた施策の課題や目的について、各部局に浸透されていないのではないかという点については、各部局に対して何のためにやっているのかという観点で根付くような形でフィードバックし、市長の政策や市の行政計画の実現にまい進していくので、引き続き、忌憚ない意見をいただきたい。</p> <p>3 閉 会</p>
---------------	--